

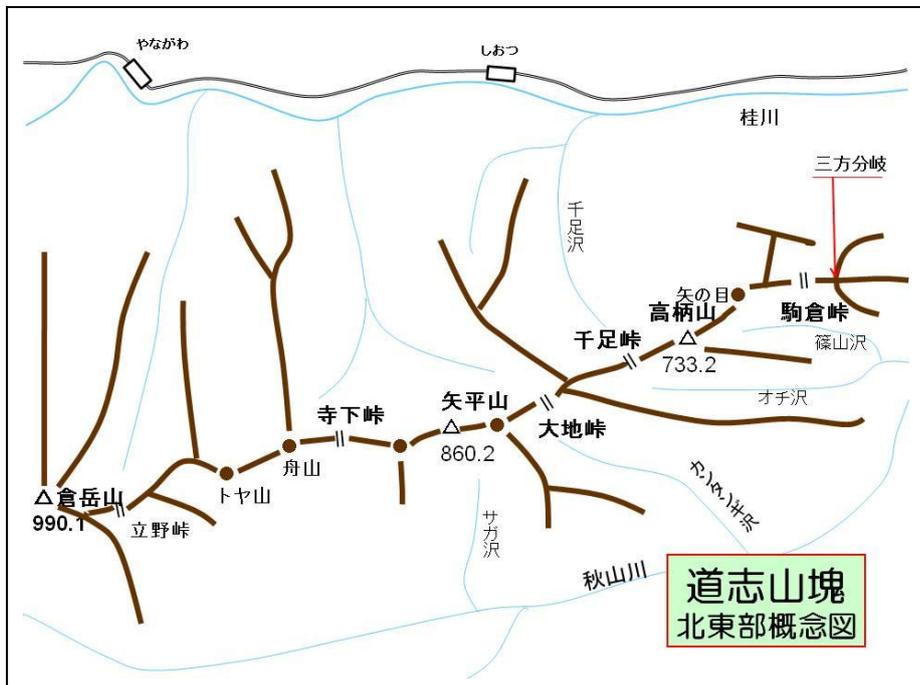
踏み跡 <My Mountains>

道志	北海道縦走(大地峠から高柄山へ)	No.140
----	------------------	--------

昭和44年12月22日

道志山塊の北端に座す終了をさらに東へ走るべく四方津駅から大地峠（おおちとうげ）に入ってみた。日帰りコースでのんびりできるのが長所ではあるが、場合によったら藪こぎもせねばならないかもしれないのが道志山塊の山歩きの欠点でもある。

高尾発 10時20分の重役出勤。四方津駅まではわずか25分。四方津駅から国道をやや戻り、桂川を渡って千足に向かう道に入る。この駅からのルートとしては川合を経て尾根から入るルートもあるようだが、今回は千足集落からのルートを選んだ。桂川を渡ると冷え冷えとしたいかにも冬の道志らしい静かさを持った小さな沢沿いの道となり、30分ほどで千足の集落到着。一見して派手なもののかかわり合いのない、喧騒などという言葉がおよそ考えられない感じの山あいの小さな集落である。



千足を過ぎてしばらくで、道は山に入って小尾根の腹に取りついた。実に静かなのんびりした、しかもさしたるアルバイトでもない登りが続き、千足から一時間余で川合からの道と合した。さらに半時ほどで大地峠に到着。

桂川の谷をはさんで北西に扇山のその名のごとき優雅なたたずまいと奥多摩の山々の遠くまでの連なり。高柄山（たかつかやま）に立つと、東側は段々に低くなり下界に向かう道志の東端がある。西側は綿々と続く枯れ葉と枯れ枝がカサと音を立てそうな尾根。倉岳山、高畑山は1000mほどの山群の中ではひととき目立つ存在である。ここからの眺めの特徴は、ひとつは最も美しい角度から見られる枯れ枝越しの白い富士であることは地図を見ているだけでも容易に気づくことであるが、私はもうひとつの眺めにも注目している。それは、桂川に沿った河岸段丘地形である。中央本線の葺崎付近の釜無川、上越線の沼田付近の利根川、そしてこのあたりの桂川はU字状の谷と流域の段丘地が目を引く。川岸は人を寄せ付けぬ絶壁になっており、そのために人里は川向うの段丘地の上の平地にしかない。上野原町もそのひとつで、今の甲州街道は桂川の岸边にあるが古くからの街道沿いにある本当の上野原の町並みは、桂川のはるか北方の旧道に沿ったところにある。その昔桂川がいかに人を寄せ付けぬものであったかも想像できる。上野原（上の方にある原）、四方津（四方を水に囲まれた所）、梁川（魚を捕るために築をしかけた）、鳥沢（鳥の群れる沢）などの地名の一端にも地形や風情が感じられるから面白い。

高柄山は、高畑山、倉岳山と並んで道志山塊では一番知られている山である。高柄山の頂上に立つと西の高畑山・倉岳山方面へはかなり明瞭な道が走っているが、東側へ向かう道は人が歩いた後の匂いが感じられない。高柄山へは大地峠から入る道はどの本にも紹介されているが、東からのルートは全くと言ってよいほどに載っていないし一般に知られてもいない。私自身も、これより東にどんな道が存在するのかは皆目見当もつかない。とにかく時計の針が許す限り、試しながら歩くしかない。14時15分という時刻からしてまだ多少の探検の余裕はありそうな気がするので、わずかに散乱するゴミを掃除して東に向けて出発。

予想に反して道は明瞭に筋を引いて迎え入れてくれた。やや高度を下げた後は比較的のんびりと歩けるような平坦な、それは林の中を散歩するような尾根が続いている。

半時ほどで色あせた道標が消え入りそうな文字で「矢ノ目」と教えてくれ、またさらに半時ほど歩を進める

踏 み 跡 <My Mountains>

と、一筋の踏み跡を分ける「駒倉峠」という表示が現れた。馬の背に乘せる鞍が起源だろうか。伊豆の天城にでもあればロマンチックな名前ですぐに有名になるだろうに、残念ながらここでは奇妙な風態の藪コギストが喜ぶだけの冴えない名前に落ち着いてしまう。

ここまでの順調な道のりも段々おぼつかなくなってきた。駒倉峠を過ぎて 15 分ほどで小さな突起を登る頃は、もう林の中の踏み跡を探りながら歩き、時々木に登って方角を確かめたりする状態になってきた。

小さな突起から眺めると、もう尾根は下る一方で道らしきものも見えない。高度を下げたことと尾根上に起伏が少ないこと、しかも林の中の藪の中ということで、位置や方角の確認はかなり難しい。

15 時 30 分を回ったところなので、適当なところから下界に向かって突っ込んで行くことにした。

枝尾根の南東に田の入の集落があるので、これを目標にして磁石の針を見ながら中央突破。30 分間枯れ葉の音楽を耳にしながら一直線に下ったら、一軒の農家の裏に出てすぐにバス道路に飛び出すことができた。浅い山はこういう無茶ができるからいい。

主稜をくぐり抜けるトンネルを出てしばらく進むと、後ろから来た車が乗せてくれた。おかげで一時間後にはもう列車の中に入ることができた。

今回の山行でわかったことは、道志の尾根は長いが高畑山から高柄山までが人に知られた尾根で、それ以外は全く人の足が入っていないのに等しいということ。昔は歩かれたのだろうが……。

最後の小突起（三方分岐と名付けることにした）から田の入のトンネルの上まではどういう道がある（あった）のだろうか？ということが疑問として残った。

以上